

14	岡 崎	緑丘小学校	スギウラ ミネ
			氏名 杉浦 美音
分科会番号	19	分科会名	読書・学校図書館

研究題目

主体的に物事を調べ、自らの興味の幅を広げていく児童の育成
～学習・情報センターとしての学校図書館の活用を通して～

研究概要

(1) 主題設定の理由

1995年に『児童生徒の読書活動に関する調査研究協力者会議報告』が出されて以降、学校図書館は、「読書センター」、「学習・情報センター」としての機能・役割をもつよう整備されてきた。この2つの機能の発揮を通じて、学校図書館は「学校教育の中核」たる役割を果たすよう期待をされている。

特に、「学習・情報センター」としての機能では、教科等の日常的な指導において図書館資料が活用されること、教室での授業で学んだことを確かめ、広げ、深める、自分の考えをまとめて発表するなど、児童生徒の主体的な学習活動を支援することが求められている。

しかしながら、「授業で図書館資料を使って調べた経験があるか」を問うと、国語、生活科では100%の児童が「ある」と回答したが、算数、理科、社会、音楽では「ある」と回答した児童は0%であった。また、「授業で学んだことについて、後から自分で本や資料を使い、調べたことがあるか」を問うと、76.6%の児童が「ない」と回答した。授業の中で図書館資料を使い、学びを深めていくこと、さらに、その学びから興味を広げ、自分で調べてみようとする意欲をもつことは「生きる力」を育む上でも重要であると考えた。

岡崎市では、岡崎市立中央図書館「りぶら」において、学習支援として、授業支援用資料の貸し出しを行っている。これらを積極的に活用することによって、授業における図書館資料の活用を充実させることができ、子どもたちが物事を主体的に調べるきっかけになると考えた。教科等によっても学校図書館の活用度合いに大きな差があるが、従来から活用が進んでいる教科だけでなく、様々な教科において活用を促進していけば、子どもたちの学びを深めるきっかけになるだろう。

また、緑丘小学校の図書室に各学年の学習に関連した本のコーナーを設けることで、授業後に自分で本を手に取りやすい環境を作り、子どもの興味の幅を広げる手助けになると考えた。

子どもたちには、自ら興味の幅を広げ、教室内の学習から飛び出して主体的に学習に向かう姿勢を身に付けてほしいと願う。その実現に向けて、環境の整備をしていくことが一番の支援になると考え、研究主題を「主体的に物事を調べ、自らの興味の幅を広げていく児童の育成～学習・情報センターとしての学校図書館の活用を通して～」に設定した。

(2) 目指す子供像

- ① 図書館資料の活用の仕方を理解し、情報収集やまとめをする中で学びを深められる子供
- ② 主体的に学びに向かい、自らの興味の幅を広げようとする子供

（３）本研究における「主体的に学ぶ姿」の捉え

本研究では、主体性を「学習内容について自ら疑問や興味をもち、図書館資料を活用して情報を収集し、学びを広げようとする姿」と定義する。具体的には、

- ・自分で調べたい内容を決める
 - ・図書館資料を活用して情報を集める
 - ・教科書以外の内容まで学びを広げる
 - ・学習内容を他教科や日常生活と関連付ける
- などの姿を主体的な学びとして捉える。

（４）研究の仮説と手立て

仮説Ⅰ

様々な教科の学習に図書館資料を活用すれば、教科書の内容にとどまらず、さらに興味・関心をもって学習内容を深めていくことができるだろう。

《仮説Ⅰに対する手立て》

- ① 岡崎市中心図書館「りぶら」における授業支援用資料の貸し出しを利用し、授業内での情報収集やまとめに活用する。
主に以下の教科、単元において、関連する内容の情報収集、まとめの時間を取る。
国語科：「道具のひみつを伝えよう」
社会科：「農家の仕事」
理科：「音のせいしつ」
総合的な学習の時間：「つくろう 親切がいっぱいのまち 緑丘大作戦！」
（今回の研究報告では社会科：「農家の仕事」での実践について報告する。）

仮説Ⅱ

図書館資料を手にとることを習慣化すれば、さらに自らの興味の幅を広げ、授業以外の時間にも主体的に本を手にとれるようになるだろう。

《仮説Ⅱに対する手立て》

- ② 国語や社会、算数、理科、音楽、総合など幅広い授業の中で、その日の学習に関連している本を紹介し、「授業に関連する本をコーナー」（以下：「３の２図書館」）に配架する。
その時々で、子供たちに興味を持ってほしい本、授業の内容を深めるのに適した本を紹介する。
その中で、子供たち自らが自分の興味に合った本を手にとることができるよう、いつでも読める環境として、教室の後ろに「３の２図書館」のスペースを作る。（常時 30 冊前後の図書を配架し、一人 1 冊は手に取れる環境を用意する。）

実践

仮説Ⅰ

様々な教科の学習に図書館資料を活用すれば、教科書の内容にとどまらず、さらに興味・関心をもって学習内容を深めていくことができるだろう。

《手立て①》授業内での情報収集やまとめに図書館資料を活用する。

【10月 社会科 「農家の仕事」での実践を通して】

3年生から始まった社会科では、身近な地域に関することから学びを深めていく。社会科「農家の仕事」では、緑丘小学校の近隣に多くあり子供たちにとって身近な作物である「柿畑」を題材として、農家の仕事について学べるよう単元を設定した。近所に住む山本さんは元教師の柿農家であり、緑丘小学校の子供たちのために、話をしてくれることになった。そこで、「おいしい柿を作るために山本さんはどんな工夫をしているのだろう」という学習課題を設定し、学習を進めた。

(単元の流れ)

- (1) 教師作成のプリントを使用し、柿農家の1年や柿作りの工夫を学習する。
- (2) 実際に柿畑に見学に行き、柿農家の山本さんの話を聞く。
- (3) まとめ(※)として、A4用紙1枚のリーフレットを作成する。

※リーフレットにまとめる際の共通ルール

- ・まとめの中には、「山本さんから学んだこと」、「学習を終えて学んだこと・感想」に加えて、身近な作物である柿について「興味を持って自分で調べたこと」を入れること。
- ・まとめる際には、文章やクイズ形式、図やイラストを使ってもよいこと。
- ・調べ学習の際には、柿に関する図書館資料を活用すること。

柿農家の1年や柿作りの工夫について事前学習で学んでから、農家の方の話を聞きに行ったため、児童はとても熱心に話を聞いたり、収穫体験をさせてもらったりしていた(資料1)。

農家の仕事や、柿の作り方について興味をもったうえで、まとめの活動に入ったため、リーフレット作りにはスムーズに取り組む児童が多かった。リーフレット作りの際に、用意した本の一例は以下の通りである(資料2)。このほかにも、総合百科事典「ポプラディア」や「WONDA植物図鑑」などを用意し、幅広い観点で「柿」について調べられるようにした。



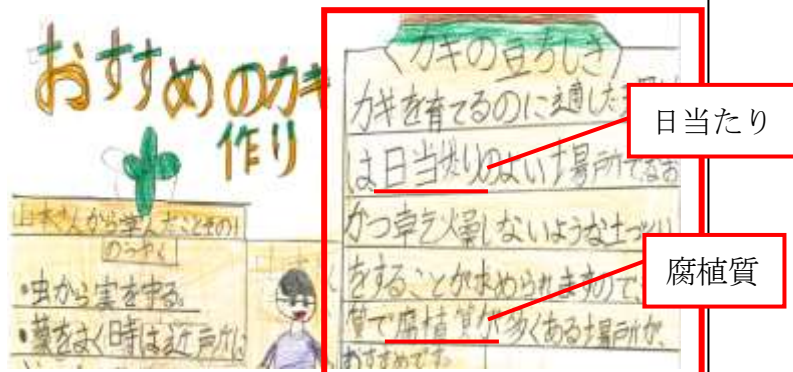
資料1 農家の山本さんの話を聞く児童A



資料2 リーフレット作りの際に用意した
図書館資料(一部)

児童Aは柿畑が、明るい場所にあったことを思い出して「柿はどんな環境が育ちやすいのか」ということに興味をもち、「土づくり」の観点で調べて「日当たり」と「腐植質」の大切さについてまとめていた(資料3)。

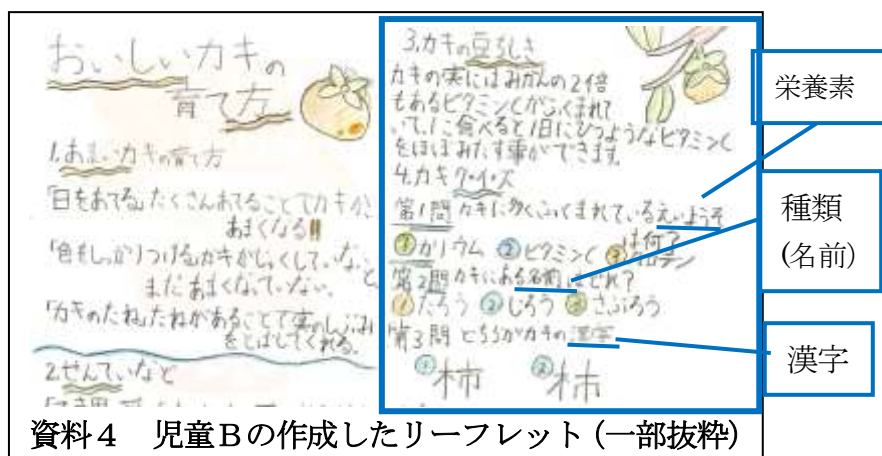
また、児童Bは、柿に含まれる栄養素や柿の種類(名前)、柿の漢字について調べていた(資料4)。児童Bは、国語が大好きな



資料3 児童Aの作成したリーフレット(一部抜粋)

児童であるため、正しい漢字の書き方に注目したと考えられる。

児童Aのリーフレットは理科、児童Bは家庭科や国語の学習に関連しており、社会科の範囲を超えて学習を進めたことが分かる。他にも、柿の歴史や柿の花言葉、干し柿の作り方へと興味を広げた児童もおり、「農家の仕事」という単位を通して、社会科の他の単位や様々な教科、領域へと派生させて学習を進めることができた。



上記より、社会科の学習の中で、図書館資料を活用することで、子供たちは教科書の内容にとどまらず、さらに興味・関心をもって教科横断的な学びをすることができたといえる。そのため、仮説Ⅰに対する手立ては有効であったと考えられる。

しかし、今回の実践で生まれた課題は以下の通りである。

① 調べたいことに関する本を、自分で探す力

今回の実践では、教師が教室に図書を用意して、その中から児童が自分に必要な情報が載った資料を選ぶ形をとった。そのため、あらかじめ教師に与えられた図書から、自分の知りたい内容を拾う力はいったと考えられる。今後は、図書の分類番号や本の並べ方等、図書館の配架のルールを覚え、自分の力で必要な資料を選ぶ経験を重ねていく必要があると感じた。自分で資料を選択するのが難しい場合には、発達段階に応じて教師が支援し、適切な資料を選択する経験を積むことが重要であると考えられる。

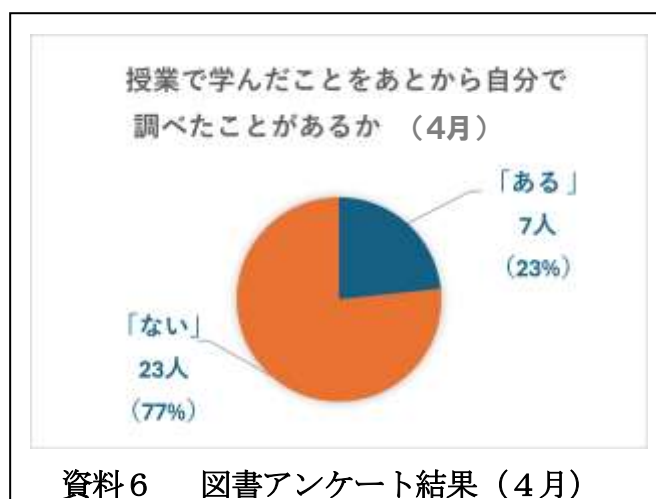
仮説Ⅱ

図書館資料を手取ることを習慣化すれば、さらに自らの興味の幅を広げ、授業以外の時間にも主体的に本を手取るようになるだろう。

《手立て②》国語科や社会科、理科、音楽科、総合的な学習の時間など幅広い授業の中で、その日の学習に関連している本を紹介し、「授業に関連する本をコーナー」（以下：「3の2図書館」）に配架する。

【「3の2図書館」の設置を通して】

4月当初にとったアンケートで、「授業で学んだことについて、後から自分で本や資料を使い、調べたことがあるか。」を問うと、30人中23人（76.6%）の児童が「ない」と回答し、半分以上の児童が授業を最後に学びが止まってしまうことがうかがえた（資料6）。そこで、授業以外の時間にも関連する図書に触れてほしいと願い、教室の後ろに「3の2図書館」を設置することにした。3の2の子たちだけが利用



できるという特別感と、いつでも読める親しみやすさを持ってもらうことを意図し、「3の2図書館」という名称を付けた。常時30冊前後の図書を配架し、休み時間や朝の読書等、時間が空いたときにはいつでも手に取ってよいことを伝え、児童は興味津々な様子で集まった（資料7）。

配架する際には、授業の中で学習に関連している本を紹介してから配架するようにした。その際には、「〇〇は、いったい何でしょう。詳しくは、本の中に答えがあるよ。」とクイズ形式で紹介し、児童が答えを気になって本を手に取りたいと思えるように工夫した。授業ごとに紹介した図書の一例は次の通りである。

（資料8）

これらの図書を配架し、どの図書を、誰が何冊手に取ったかのアンケートを取ると、一人当たり平均6.2冊（9月から11月の約2か月）読まれたことが分かった。読書習慣の少ない児童でも、「先生が言っていたクイズの答えを探したい」と休み時間を利用して最低1冊は本を手にとっており、最高で17冊読んだ児童もいた。学級の児童全員が1回は、授業以外の時間に「3の2図書館」の本を手にとっていたことから、いつでも読みたいときに手に取りやすい環境を作ることの重要性がうかがえた。また、3月初旬に「3の2図書館」を撤去した際、児童が「3の2図書館、もうなくなっちゃうの？すぐ読めてうれしかったのに」と話したことがあった。そのことから、読みたい時に本をさっと手に取れる環境の設置は、有効であったと考えられる。

4月当初と同じアンケートを3月に行うと、「授業で学んだことについて、後から自分で本や資料を使い、調べたことがあるか」の項目では、31人中31人が「ある」と回答した（資料9）。

これは、「3の2図書館」の本を、授業以外の時間に全員が1回は手に取っていたことから分かり、「先生が紹介した本が気になるな」と思い、手に取った結果であるといえる。「3の2図書館」の設置



児童B

資料7

「3の2図書館」から図書を選ぶ児童



国語科



社会科



理科



総合的な学習の時間

資料8 紹介した図書の一例（教科別）

授業で学んだことをあとから自分で調べたことがあるか（3月）

「ない」
0人
(0%)



「ある」
31人
(100%)

資料9 図書アンケート結果（3月）

によって、主体的に本を手にする児童が増えたことから、仮説Ⅱに対する手立ては有効であったといえる。

しかし、この実践においても課題が3点あると感じた。

① 児童が興味を持てるような選書と紹介の仕方

本を紹介する際には、あらかじめ図書を選んでおき、授業の終わりに児童に紹介することが多かったが、紹介する書籍によって児童の興味関心には差があった。「太陽と熱」という書籍を紹介したときの児童の反応は、興味を示す前向きなものが多かったのに対し、「ローマ字」の書籍を紹介した時の児童の反応は薄く、差があった。どちらも児童に学びを深めてほしいと願って紹介したが、それぞれの図書の利用率（手に取られた割合）にも差があり、「太陽と熱」は、31人中13人（41.9%）が手に取っていた一方で、「ローマ字」の書籍は、31人中2人（6.4%）しか手に取っていなかった。このことから、児童の興味関心に寄り添いつつ、さらに学びを深められるように意図的に選書することが求められ、教師も様々な書籍を知っておくことの必要性について考えさせられた。

② 文字が多い図書への抵抗感

配架した図書の中で、特に人気があったのは、漫画形式で書かれている書籍や、絵本、写真の多い書籍であった。特に、読書経験の浅い児童ほどその傾向が顕著であり、今回手に取った冊数が1・2冊のみだった児童は、漫画形式や写真の多い書籍を選んでいった。漫画形式で楽しく学べたり、イラストや写真といった視覚的情報をもとに学んだりすることもよいことだが、様々なジャンルの図書から情報を得られるようにするには、文字が多い図書にも抵抗なく触れてほしいと願う。そのためには、読書経験を豊かにし、様々な図書に触れる機会を作ることが重要だと考える。読書経験の浅い児童には、まずは少しずつでも図書に触れてもらうこと、文字の多い図書にはより深い情報が載っていて面白いと感じられる経験を積めるようにすることが有効なのではないかと考える。

③ 主体的に図書を選んでさらに学びたいと思う動機づけ

仮説Ⅰの内容でも挙げたが、今回は「3の2図書館」という、教師が意図的に選書した中で児童は図書を選んでいった。「3の2図書館」を撤去した際に、「もうなくなっちゃうの」という声が上がったことから、「近くにあれば読むが、図書館や図書室に行って本を読もう」とまでは、まだ考えていない様子が見受けられた。わざわざ図書室に行っても、さらに学びたいと思う動機づけをすることができるようにと考える。

そのためにも、本を読むことが習慣化されるよう、始めは身近な環境に図書を置き、いつでも読める、学びたいと思った時にさらに深く学べるという環境を作ることが第一歩だと考える。

今回の実践では、手に取った冊数が1・2冊の児童もいたとはいえ、全員が1度は手に取って読んでいた。図書を開けば、さらに詳しく学べるという経験を幼いうちから積める環境を今後も作り、主体的に図書を選べる児童を育成していきたい。

成果とまとめ

図書館資料を授業で活用することで、児童が教科書の内容にとどまらず興味を広げ、自ら学びを深める姿が見られた。また、「3の2図書館」の設置により、児童が、授業で学んだことに関する本を手にする経験につながり、4月には23.3%だった「授業後に本や資料を使って調べた経験がある」児童が、3月には100%となった。今後も、児童が身近に図書館資料に触れられる環境を整えながら、自ら興味の幅を広げていく児童の育成を目指していきたい。